

SSH特別講義「成果発表会2か月前講座 ー探究のツボ、発表のツボー」

実施日程 令和4年11月22日(火) 16:00~17:00

実施場所 本校 至誠ホール

講師 岳川 有紀子 こどもサイエンスプランニング代表

参加生徒 2年生探究IIスタンダード選択、
科学系クラブ員 計約100名



■仮説

本校のSSH運営指導委員であり、元科学館の学芸員という立場から、プレゼンテーションとは何か、また、どのようなプレゼンテーションが望ましいのかの講義を受講することで、2月の成果発表会への発表準備がより効率的かつ有意義なものになる。また、発表者だけでなく聴衆としてのふるまいについても学ぶことで、質疑応答が活発な発表会にすることができる。

■実践

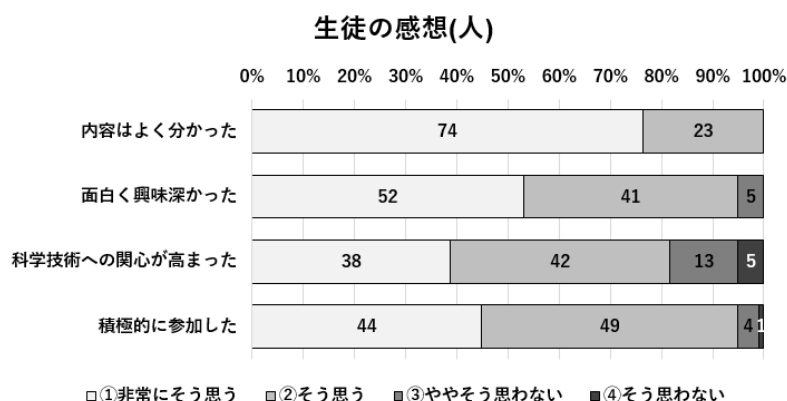
本校のSSH運営指導委員として中間発表会や成果発表会を長年に渡って見てこられた中で、「もっとここをこうすればよい発表になるのにと」感じていた内容を話していただいた。ポスターによる中間発表を終えて、口頭発表による成果発表に向けてどのような準備が必要か、どのような発表が望ましいかの講義を受けた。また、今年度の中間発表会の反省点である「質問の少なさ」について、発表者側と聴衆者側の両面からの打開策を教えていただいた。

■評価

受講生は昨年、見学者として成果発表会に参加したが、発表する側の準備や心構えについてはあまり実感しておらず、様々な気づきや自覚を促す有意義な講義であった。質疑応答の時間には、多くの質問がなされ、発表を聴く姿勢をすぐに意識していた様子もうかがえた。

■資料

●事後アンケート結果



●参加者の声

- ・質問をすることで自分を強くできるという考え方をしたことがなかったので勉強になった。ちょっとしたことでも質問できるようにメモや線を引ながら発表や講習などを聴くようにしたい。
- ・研究するときの大事なことは、自分の研究について自分で問うて文字にすることで、発表のときは自分と聴衆ともコミュニケーションが大切だと思った。また「伝えるプレゼン」ではなく、「伝わるプレゼン」をするために、聴衆の表情や目を見てプレゼンをする必要があると感じた。
- ・中間発表の時は、考えた内容や実験結果を伝えようと必死に伝えたい内容を覚えて発表していたけれど、自分の表情を活用したり、言い直したりは全くできていなかったなど思いました。質問をするのは私にとって勇気をもってしなければいけないことなので、質問をした人に感謝して、その場にいる人全員が共有できるように応答したいと思った。